

アイスランドにおけるホエール・ウォッチングをめぐる一考察

浜口 尚¹⁾

A Note on Whale Watching in Iceland

Hisashi Hamaguchi¹⁾

要 旨

アイスランドは、世界でも数少ないホエール・ウォッチングと捕鯨が並存する国の一つである。2015年、外国人観光客128万9100人がアイスランドを訪れており、そのうち27万1800人が同国周辺海域でのホエール・ウォッチングに参加している。その一方、同年、アイスランドにおいては、商業捕鯨としてナガスクジラ155頭とミンククジラ29頭が捕殺されている。現在、首都レイキャヴィクを取り囲むファクサ湾の内側では、ミンククジラほかを対象とするホエール・ウォッチングが実施され、その外側ではミンククジラ捕鯨が実施されている。海図上に引かれた一本線がホエール・ウォッチング専用海域と捕鯨海域を隔てる境界となっているだけであり、時にその隣接性が両事業者間に軋轢を引き起こしている。現地調査を実施した筆者は、ホエール・ウォッチングと捕鯨が共存するためには、ホエール・ウォッチング専用海域と捕鯨海域の間にある程度の幅をもつ緩衝帯が設定されることが望ましいと考えている。

Abstract

Iceland is one of a few countries where whale watching and whaling are simultaneous activities. In 2015, 1,289,100 foreign tourists visited Iceland, of which 271,800 participated in whale watching. In the same year, whalers harvested a total of 155 fin whales and 29 minke whales. While whale watching for minke whales occurs in inner Faxaflói bay, along the capital city of Reykjavík, whaling for minke whales operates just outside the whale watching zone. Because the two zones lie adjacent, periodic friction between the whale watching boats and the whaling boats occurs. The author proposes a “buffer zone” between the two zones for the peaceful co-existence of whale watching and whaling in the Faxaflói bay.

はじめに

ホエール・ウォッチング研究の第一人者ホイトは、ホエール・ウォッチングを「84種のクジラおよびイルカを觀賞するための、あるいはその鳴き声を聞くための何らかの商業的要素を伴った航空機、船舶による、あるいは陸上でのツアー」(Hoyt 2007)として定義している。一方、2014年にホエール・ウォッチング研究の進展を総括した論文集を出版したヒグハムらは、ホイトよりも幅広く「陸上、海上、あるいは空中から、人々に野生の鯨類を觀察し、それらと共に泳、もしくは接触し、あるいはそれらに給餌する機会を提供することを伴う旅行者向けの商業的な冒険的企て」(Higham et al. 2014)と定義している。

本稿においては、アイスランドにおけるホエール・ウォッチングの実態を踏まえて、ホエール・ウォッチングを幾分、字義的、限定的に解釈し、「商業的要素を伴う船上からの鯨類の觀察」と定義しておく。

1991年、全世界において404万7000人が広義のホエール・ウォッチングに参加し、その直接消費(ホエール・ウォッチング船の乗船料)は7703万4000米ドル、間接消費(ホエール・ウォッチングに伴う食費、宿泊費、旅費、土産物代など)を含む総消費は3億1785万4000米ドルであったが、1998年には、参

加者数902万200人、直接消費2億9950万9000米ドル、総消費は10億4905万7000米ドルとなり(Hoyt 1999, ホイト 2002)、2008年には、参加者数1297万7200人、直接消費8億7270万米ドル、総消費21億1310万米ドルとなっている(O'Connor et al. 2009)。加えて、筆者が入手しえた最新の統計では、全世界における2011年時点のホエール・ウォッチング参加者数は1500万人となっている(New et al. 2015)(表1)。

以下、本稿においてはアイスランドにおけるホエール・ウォッチングについて、次の手順で考察する。まず、アイスランドにおけるホエール・ウォッチングの歴史を概括したうえで、現地調査に基づいてその現況を報告する。次に、首都レイキャヴィクを取り囲むファクサ湾におけるミンククジラを対象とするホエー

表1. 全世界、ホエール・ウォッチング統計

年	参加者数(人)	直接消費額(米ドル)	総消費額(米ドル)
1991	4,047,000	77,034,000	317,854,000
1998	9,020,200	299,509,000	1,049,057,000
2008	12,977,200	872,700,000	2,113,100,000
2011	15,000,000	N/A	N/A

出典 (ホイト 2002, New et al. 2015, O'Connor et al. 2009)

1) 園田学園女子大学短期大学部 〒661-8520 兵庫県尼崎市南塚口町7丁目29番1号

1) Sonoda Women's College, 7-29-1, Minami-tsukaguchi, Amagasaki, Hyogo 661-8520 Japan

ル・ウォッチングと捕鯨との競合状況を検討する。最後に、ホエール・ウォッチングと捕鯨の共存をめざして、ホエール・ウォッチング専用海域と捕鯨海域の間にある程度の幅をもつ緩衝帯を設けることを提言して、本稿のまとめとする。

アイスランドを取り上げる理由は、同国が今日でも商業捕鯨を実施している数少ない国の一つであり、かつまた同一湾内において同一鯨種(ミンククジラ)を対象とするホエール・ウォッチングと捕鯨が並存しており(浜口 2017)、ホエール・ウォッチングについて考察するうえで非常に興味深い事例を提供していると考えられるからである。

資料と方法

筆者は、2016年7月28日から8月8日までアイスランドにおいて、ホエール・ウォッチングと捕鯨にかかる現地調査を実施した。ホエール・ウォッチングについては、アイスランド・ホエール・ウォッチング協会(The Icelandic Whale Watching Association、通称IceWhale、以下「IceWhale」と表記)事務局長と面談し、アイスランドにおけるホエール・ウォッチングの現況に関する最新情報を入手した。また、首都レイキャヴィクを取り囲むファクサ湾において実施されている大型船によるホエール・ウォッチングに2回参加し、関連資料を収集した。捕鯨については、大型捕鯨会社Hvalur社・社長および小型捕鯨会社IP Útgerð社・社長と面談し、アイスランドにおける商業捕鯨の現況に関する最新情報を入手した。また、大型鯨類用の鯨体処理施設の施設内と大型捕鯨船の船内を見学調査した。なお、アイスランドにおける捕鯨の歴史と現況について、筆者はすでに報告文を発表している(浜口 2017)。

用いた資料は、現地調査において収集した一次資料に加えて、学術雑誌に発表されたアイスランドにおけるホエール・ウォッチングと捕鯨に関する文献、ウェブサイトから入手した政府関係機関、鯨類保護団体、ホエール・ウォッチング事業者、地元メディアが公表している関連資料である。

結果と考察

ホエール・ウォッチングの歴史

まず、アイスランドにおけるホエール・ウォッチング発展の歴史を振り返ってみる。1982年に開催された第34回国際捕鯨委員会年次会議において、商業捕鯨の一時停止が決議され、それを受けて捕鯨国アイスランドも1989年の特別許可によるナガスクジラ68頭の捕殺を最後に、捕鯨の一時停止に踏み切った(浜口 2017)。この捕鯨の一時停止は、2003年に同じく特別許可によりミンククジラ37頭が捕殺されるまで、13年間続くのである(浜口 2017)。この捕鯨の中断期が、アイスランドにおけるホエール・ウォッチングの発展に大きく寄与した。

1990年、捕鯨の一時停止を待っていたかのように鯨類保

護団体の「国際動物福祉基金」(International Fund for Animal Welfare、略称IFAW、以下「IFAW」と表記)が、アイスランド海域におけるホエール・ウォッチングの実現可能性調査に資金提供を行い、同調査の結果、ホエール・ウォッチングは実現可能と判断された(Einarsson 2009)。翌1991年、アイスランド南東部の町フォブニにおいて、同国で初めてのホエール・ウォッチングが実施され、初年度に100人がホエール・ウォッチングに参加した(Rasmussen 2014)。

1995年、今度は別の鯨類保護団体「クジラ・イルカ保護協会」(Whale and Dolphin Conservation Society、略称WDCS。後にこの団体はWhale and Dolphin Conservation、略称WDCと名乗るようになる。以下「WDC」と表記)が、将来においてホエール・ウォッチングの創業をめざす事業者を集めてホエール・ウォッチングのワークショップを開催した(ホイト 2002)。同年、アイスランド北部の町フーサヴィクにおいて、ホエール・ウォッチング事業が立ち上げられ、初年度に2200人がホエール・ウォッチングに参加した(O'Connor et al. 2009)。その後、フーサヴィクはホエール・ウォッチングの町として発展していく。1998年にはクジラ博物館が開館し、続いてレストランや宿泊施設なども整備された(O'Connor et al. 2009)。2010年、同町は約5万人のホエール・ウォッチング客を集め、同年、フーサヴィクは世界におけるホエール・ウォッチングの最良場所10か所のうちのの一つに選ばれている(Rasmussen 2014)。

鯨類保護団体の活動に戻れば、1999年、IFAWがアイスランド国内のホエール・ウォッチング事業者と海外の鯨類研究専門家を集めてワークショップを開催し(ホイト 2002)、2008年には同じくIFAWがIceWhaleと共に世界ホエール・ウォッチング会議を開催している(Rasmussen 2014)。直近では2016年にWDCがアイスランドにおけるホエール・ウォッチング創業25周年を祝う国際イベントを開催している(WDC 2016)。

以上のようにアイスランドにおいては、捕鯨が一時停止している間隙について、鯨類保護団体が競い合ってホエール・ウォッチングの事業基盤の確立に邁進し、捕鯨再開後も引き続きホエール・ウォッチングの発展を支援しているのである。

以下、アイスランドにおけるホエール・ウォッチング発展の歴史を表にまとめておく(表2)。

表2. アイスランド、ホエール・ウォッチング統計

年	参加者数(人)	直接消費額(米ドル)	総消費額(米ドル)
1991	100	17,000	60,000
1998	30,300	2,958,000	6,470,000
2008	114,500	6,618,000	16,709,000
2015	271,800	N/A	N/A

出典(ホイト 2002, IceWhale, personal communication, O'Connor et al. 2009)

ホエール・ウォッチングの現況

アイスランドにおけるホエール・ウォッチング事業の指導的立場にある組織がIce Whaleである。Ice Whaleは1999年にホエール・ウォッチング事業者の任意団体として発足し、2014年に非営利活動法人（NPO）として登録している。2016年現在、アイスランド全土においては14社がホエール・ウォッチング事業を実施しており、そのうち10社がIce Whaleに加盟している。

Ice Whaleは鯨類への影響を最小限にし、持続的なホエール・ウォッチング事業を実施するために、「鯨類には触れない。一緒に泳がない。餌をやらない」などを定めた「事業規範」(Code of Conduct) を策定し (Ice Whale 2014)、ホエール・ウォッチング事業者の意識啓発に努めている。同規範には、Ice Whale加盟10社と非加盟2社が署名している。

2016年8月に面談したIce Whale事務局長によれば、2015年、アイスランドでは27万1800人がホエール・ウォッチングに参加しており、過去7年間で参加者数は2.4倍となっている (Ice Whale, personal communication, August 4, 2016) (表2)。

アイスランドの玄関口、首都レイキャヴィクにおいては、Elding社、Reykjavik Sailors社、Special Tours社、Whale Safari社の4社がホエール・ウォッチング事業を展開している（全社がIce Whaleに加盟）。Elding社は大型船2隻（乗客定員200人と144人）と小型高速艇3隻（同各12人）、Reykjavik Sailors社は大型船1隻（同200人）、Special Tours社は大型船2隻（同200人と198人）と中型船1隻（同65人）、Whale Safari社は小型高速艇4隻（同各12人）を稼働させている。

2016年の乗船料金（ホエール・ウォッチング参加料金）は、4社とも大・中型船1人9900ISK（アイスランド・クローナ）（8910円、1ISK=0.9円、現地調査時）、小型高速艇1人2万2990ISK（2万690円）であった。

筆者は2016年7～8月、そのうちの2社、Elding社とSpecial Tours社の大型船によるホエール・ウォッチングに参加した。同期間中、Elding社は大型船によるホエール・ウォッチングを1日6回、小型高速艇によるホエール・ウォッチングを1日7回実施していた。一方、Special Tours社は大型船によるホエール・ウォッチングを1日3回、中型船によるホエール・ウォッチングを7月は1日3回、8月は1日2回実施していた。以下、筆者によるホエール・ウォッチングの体験談を報告する。

Elding社のホエール・ウォッチングには7月31日に参加した。同日の天候は晴れ、風波は強くなかった。ホエール・ウォッチング船Elding（全長23.88m、船幅6.8m、乗客定員144人）(Elding n.d.) に乗船し、レイキャヴィク旧港を午前9時に出港、ファクサ湾内を周航探鯨し、12時過ぎに帰港する3時間程度の航海であった（写真1）。航海中、ザトウクジラを1回、ミンククジラを4回、ハナジロカマイルカのジャンプを5回目撃した。大型



写真1. ホエール・ウォッチング船Elding甲板上での探鯨風景（2016年7月31日撮影）

船のため、クジラ発見の放送があれば甲板に出て鑑賞、あとは船室内でくつろぐなど、のんびりとホエール・ウォッチングを楽しむことができた。

帰路はガイドさんが船室内で、目撃した鯨類やファクサ湾内に生息する他の鯨類について解説、あわせて湾内でのミンククジラ捕鯨についても触れ、「現在までのところ、34頭のミンククジラが捕殺されている」との説明もあった。Elding社の待合室にはIFAWのポスターも貼られており、同社とIFAWとの繋がりを垣間見ることができた。

Special Tours社のホエール・ウォッチングには8月7日に参加した。同日の天候は晴れであったが、風が強く、海は時化していた。ホエール・ウォッチング船Andrea（全長34.11m、船幅7.83m、乗客定員200人）(Special Tours n.d.) に乗船し、レイキャヴィク旧港を午前9時に出港、ファクサ湾内を周航探鯨し、12時過ぎに帰港する3時間程度の航海であった（写真2）。同日は海が時化していたため、ザトウクジラやミンククジラは目撃できなかったが、ハナジロカマイルカは目撃できた。レイキャヴィク滞在中、2回ホエール・ウォッチングに参加し、2回とも鯨類を目撃できた。現地で購入したSpecial Tours社の宣伝用パンフレットに記載されている「5～9月の鯨類遭遇率、92～99%」も実数に近いのかもしれない。



写真2. 航海中のホエール・ウォッチング船Andrea（2016年7月31日撮影）。本写真はEldingでのホエール・ウォッチング中に撮影



写真3. ザトウクジラと思われるクジラに接近する小型高速艇
(2016年7月31日撮影)

今回も帰路、船室内でガイドさんによる鯨類一般およびファクサ湾内に生息する鯨類についての解説があったが、捕鯨についての話は一切なかった。また船内にも反捕鯨関連のポスター類もなく、Elding社とはかなり違っていた。待合室にIFAWのポスターを掲示し、ホエール・ウォッチング船内で捕鯨活動の現況を語るElding社と捕鯨活動には触れないSpecial Tours社、ホエール・ウォッチング事業者間でも捕鯨とのかかわり方には明らかに差異があった。

ホエール・ウォッチング参加の際に気になったのは、小型高速艇によるホエール・ウォッチングであった。7月31日にWhale Safari社の小型高速艇によるホエール・ウォッチングを目撃することができた(写真3)。IceWhaleの事業規範には「鯨から半径50～300mでは、鯨の後を追うことは避ける。船は、鯨の後方、斜めの角度から、注意深く接近することによって、鯨と並行する動きをする」(IceWhale 2014)とある。海上では、真後ろと斜め後方の判断は難しい。また、IceWhaleが鯨の生態と行動に配慮した事業規範を制定したとしても、現場での運用は各事業者に委ねられている。この小型高速艇によるホエール・ウォッチングが鯨類に与える影響については、今後より詳細なデータを収集していくことが不可欠である。

競合の海

アイスランドは数少ない商業捕鯨実施国の一つである。2015年、ナガスクジラ155頭とミンククジラ29頭が捕殺され、2016年にはミンククジラ46頭が捕殺されている(浜口 2017)。このうち、ホエール・ウォッチングと直接対峙しているのが、ファクサ湾内で操業しているミンククジラ捕鯨である。

2016年、IP Útgerð社の捕鯨船Hrafnreyður(写真4)とRuno社の捕鯨船Rokkarinnの2隻が、ファクサ湾内においてミンククジラ捕鯨に従事している(浜口 2017)。IP Útgerð社の社長の父親は、現職の国会議員で2016年当時の連立与党の一つ、独立党(Independence Party)の一員である(浜口 2017)。Runo社のほうも、もう一方の連立与党であった進歩党(Progressive Party)と関係があるとされている(浜口 2017)。

上述のように、ファクサ湾では4社がホエール・ウォッチングに従事している。同湾の陸域に隣接する一定海域がホエール・ウォッチング専用海域とされ、その外側で捕鯨が実施され



写真4. 停泊中のミンククジラ捕鯨船Hrafnreyður(2016年8月1日撮影)

ている。ホエール・ウォッチング専用海域と捕鯨海域との間には海図上に境界線が引かれていて緩衝帯はない。

2013年5月、前月に実施されたアイスランド国総選挙の結果を受けて、社会民主同盟(Social Democratic Alliance)と左派=環境運動(Left-Green Movement)による連立政権は崩壊し、多数派となった進歩党と独立党による連立政権が発足した(Iceland Review 2013a)。この政権交替により退任することとなった左派=環境運動所属の漁業大臣は、最後の置き土産としてホエール・ウォッチング専用海域を拡大した(Iceland Review 2009, 2013b)。同年7月、後任の進歩党所属の漁業大臣は前任者の決定を取り消し、ホエール・ウォッチング専用海域を元に戻した(Iceland Review 2013a, 2013c)。2016年8月に面談したIceWhale事務局長によれば、同団体の主要活動の一つがホエール・ウォッチング専用海域の再拡大(左派=環境運動所属の元漁業大臣が設定した海域まで)であるとのことであった(浜口 2017)。

この海図上に引かれた境界線をめぐる攻防からわかるように、ファクサ湾はホエール・ウォッチング事業者と捕鯨事業者が、それぞれの事業海域の拡大をめざしてロビー活動を展開する「競合の海」となっているのである。

ホエール・ウォッチング事業者にとって、専業海域の拡大は鑑賞対象となるミンククジラとの遭遇機会を増加せしめる効果があり、一方、捕鯨事業者にとって事業可能海域の陸域隣接海域への拡大は事業効率を高める効果がある。但し、上述の進歩党所属漁業大臣による決定は、捕鯨海域を元々の海域に戻しただけであり、旧来以上に拡大したわけではない。捕鯨事業者は一定範囲のホエール・ウォッチング専用海域を容認しているのである。これに対して、IceWhaleはそのホームページ上に「ホエール・ウォッチングと捕鯨は両立しない」(IceWhale n.d.)と記載し、究極的には商業捕鯨の中止を求めている。

非致命的にミンククジラを利用するホエール・ウォッチング事業者が、ミンククジラを致命的に利用する捕鯨事業者を支持できないのは、わからなくもないが、双方ともミンククジラを商業

目的で利用している事実に相違はない。捕鯨事業者は、確かに個体としてのミンククジラを捕殺しているが、その個体が属している全体としての「東グリーンランド=アイスランド=ヤンマイエン島集団」(MRI 2012)を減少させているわけではない。ミンククジラの捕殺は年間捕殺割当数229頭という持続的利用可能範囲内で実施されている(MRI 2012)。繰り返すが、ミンククジラを商業目的で利用している点において、ホエール・ウォッチングと捕鯨は同じなのである。私たちは、その事実を理解しなければならない。

ホエール・ウォッチングと捕鯨の共存をめざして

アイスランドにおけるホエール・ウォッチングの事業化に貢献してきた鯨類保護団体のIFAWとWDCは、そのホームページ上において、「商業捕鯨を終わらせるために、全ての可能な国際条約と合法的な戦略を用いる。21世紀における唯一かつ真に持続的な鯨類の利用法として、責任のあるホエール・ウォッチングを支持する」(IFAW n.d.)、「ホエール・ウォッチングとドルフィン・ウォッチングは、捕鯨およびイルカ漁に対する経済的に採算がとれ、かつ倫理に合った代替法である」(WDC n.d.)と謳い、ホエール・ウォッチングこそが捕鯨に代替しうるものとしている。果たしてそうなのであろうか。

2010年と2011年にファクサ湾で実施されたホエール・ウォッチング船のミンククジラに与える影響調査によれば、ホエール・ウォッチング船は、ミンククジラに曲がりくねった遊泳や呼吸間隔の短縮を強いることにより摂餌行動を攪乱する影響を与えており、その結果、長期的にはミンククジラの生存や生殖に悪影響を与える可能性もある、との結果が提出されている(Christiansen et al. 2013)。

物陰に身を潜めて双眼鏡等を用いて鳥類を観察するバード・ウォッチングとは異なり、ホエール・ウォッチングは対象物に身を晒して追跡することを前提としており、対象物は追跡されていることを認知する。大型船であれ、小型高速艇であれ、ホエール・ウォッチング船は対象となる鯨類に対して上述のような悪影響を与えている可能性を否定できない。鯨類保護団体の一部が主張する「予防原則」(深刻な環境影響が予想される場合に、その因果関係が科学的に立証できなくとも、対策を行うという考え方)(石井・真田 2015)に忠実であるならば、ホエール・ウォッチングも避けたほうがよいのかもしれない。しかしながら、アイスランドにおいてホエール・ウォッチングが事業化されてから25年が経過した現在、この選択は現実的ではない。

アイスランドは商業捕鯨実施国である。そのことは、鯨肉料理を食べようと思えば、食べることができる国であることを意味している。2009年6月から8月にかけて、ファクサ湾内で稼働しているElding社のホエール・ウォッチング船上において、ホ

エール・ウォッチング客を対象として、捕鯨への賛否、鯨肉食経験の有無、捕鯨のホエール・ウォッチングに与える影響などを問うアンケート調査が実施された。非捕鯨国からのホエール・ウォッチング客[n=1338]の75.2%は捕鯨に反対であり、また57.1%は捕鯨はホエール・ウォッチングにとって有害であると考えているが、彼(彼女)らのうちの18.2%はアイスランドにおいて鯨肉を食したことがある、という興味深い結果が発表されている(Bertulli et al. 2016)。鯨肉料理を味わうことのできない非捕鯨国からの観光客にとって、アイスランドは好奇心を満たす観光目的地となっているのである。彼(彼女)らにとって、ホエール・ウォッチングと捕鯨は両立するのである。

このアンケート結果にショックを受けた(と思われる)IFAWとIceWhaleは、2010年春より観光客に鯨肉料理を食べないことを求める「Meet Us Don't Eat Us」キャンペーンを始めている(IceWhale n.d.)。その効果はどれほどあったか、筆者は把握していないが、2016年7月末にElding社のホエール・ウォッチングに参加した際、待合室に同キャンペーンのポスターが掲示されていた。6年経ってもキャンペーンが継続していること自体、観光客による鯨肉料理の一定量の消費も継続していることを物語っている。

2008年に11万4500人であったアイスランドのホエール・ウォッチング客は2015年には27万1800人に増加し(IceWhale, personal communication, August 4, 2016)、観光客全体では50万2300人から128万9100人に増加している(Icelandic Tourist Board n.d.)。

観光の魅力は非日常性にある。鯨類を目で見て楽しみ、舌で味わって満足する観光客がいたとしても、それはその人の余暇の過ごし方の一つである。レストランにおいて鯨肉料理が提供されているにもかかわらず、「これは食べてはいけません」など、個人の嗜好に干渉するようでは観光地としては失格である。幸いにして、アイスランドにおいては、ホエール・ウォッチング客も観光客全体も増加している。この現実を考慮に入れたならば、ホエール・ウォッチング事業者もホエール・ウォッチングと捕鯨が共存する道を探る方向に思い切って舵を切ってみる時期にきていると筆者は考えている。

おわりに

結果と考察において、筆者は、ホエール・ウォッチング事業者もホエール・ウォッチングと捕鯨が共存する道を探る方向に思い切って舵を切ってみる時期にきていると述べた。

では、ホエール・ウォッチングと捕鯨が共存するためには、どのような方法が考えられるのであろうか。一般的には、時間、空間、鯨種を考慮に入れることにより、ホエール・ウォッチングと捕鯨との競合回避が可能となる。

すなわち、年間を通してホエール・ウォッチング期間と捕鯨

期間を分けるか、ホエール・ウォッチング専用海域と捕鯨海域を分けるか、あるいはホエール・ウォッチング対象鯨種と捕鯨対象鯨種を分けるかである。

アイスランドの場合、回遊してくるミンククジラをホエール・ウォッチングと捕鯨の対象としているため、6月から9月が双方の主要活動(事業)期となり、時間で分けることは不可能である。ホエール・ウォッチングはミンククジラだけを対象としているわけでないが、小型捕鯨事業者はミンククジラを捕殺対象としているので、鯨種で分けるのも不可能である。

結局のところ、現状どおりファクサ湾の内側をホエール・ウォッチング専用海域とし、その外側で捕鯨を実施するしかないであろう。しかしながら、それでは何も変わらない。筆者としては、ホエール・ウォッチング専用海域と捕鯨海域の間にある程度の幅(ミンククジラが無呼吸で海中を移動できる距離以上)をもつ緩衝帯を設けることを提言したい。

日本においては、2007年8月に北海道羅臼町沖でホエール・ウォッチング船が小型沿岸捕鯨船によるツチクジラの捕殺現場に接近し、騒ぎを引き起こしたことがある(毎日新聞2007)。ホエール・ウォッチング専用海域と捕鯨海域の間に緩衝帯を設ければ、ホエール・ウォッチング客に目撃された鯨類が次の瞬間に捕殺される可能性はなくなるであろう。それだけでも両者の共存に一步近づくと筆者は考えている。

謝辞

本研究は、平成28年度科学研究費補助金(基盤研究A)課題番号15H02617「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究」(研究代表者・岸上伸啓国立民族学博物館教授)の助成を受けています。また、アイスランドにおける現地調査の実施に際しては、小松正之先生(東京財団・上席研究員)とKristján Loftssonさん(Hvalur社・社長)から、写真撮影した鯨類の同定に関しては、石川創さん(下関海洋科学アカデミー鯨類研究室・室長)から、ご助言・ご協力を受けました。記して謝意を表します。

引用文献

- Bertulli, C. G., Leeney, R. H., Barreau, T. and Matassa, D. S. (2016) Can whale-watching and whaling co-exist? Tourist perceptions in Iceland. *Journal of the Marine Biological Association of the United Kingdom*, 96 (4) : 969-977.
- Christiansen, F., Rasmussen, M. and Lusseau, D. (2013) Whale watching disrupts feeding activities of minke whales on a feeding ground. *Marine Ecology Progress Series*, 478: 239-251.
- Einarsson, N. (2009) From Good to Eat to Good to Watch: Whale Watching, Adaptation and Change in Icelandic Fishing Communities. *Polar Research*, 28 (1) : 129-138.
- Elding (n.d.) Elding. <<http://elding.is/elding>> Accessed August 1, 2016.
- 浜口 尚 (2017) アイスランド捕鯨—歴史、現況および課題—。園田学園女子大学論文集, 51: 119-140.
- Higham, J., Bejder, L. and Williams, R. (2014) Tourism, cetaceans and sustainable development: Moving beyond simple binaries and intuitive assumptions. In Higham, J., Bejder, L. and Williams, R. eds., *Whale-watching: Sustainable Tourism and Ecological Management*. pp.1-15., Cambridge University Press, Cambridge, UK.
- Hoyt, E. (1999) *The Potential of Whale Watching in the Caribbean: 1999+*. 80pp., Whale and Dolphin Conservation Society, Bath, UK.
- Hoyt, E. (2007) *A Blueprint for Dolphin and Whale Watching Development*. 28pp., Humane Society International, Washington D.C., USA.
- ホイト, エリック (2002) 世界に広がるホエールウォッチング. 330pp., PACI国際海洋自然観察員協会, 東京.
- Iceland Review (2009) Iceland's PM: Optimistic after Talks with Left Greens. <<http://icelandreview.com/news/2009/04/28/icelands-pm-optimistic-after-talks-left-greens>> Accessed December 11, 2016.
- Iceland Review (2013a) New Government of Iceland to Take Over. <<http://icelandreview.com/news/2013/05/23/new-government-iceland-take-over>> Accessed December 11, 2016.
- Iceland Review (2013b) Whale Reserve in Southwest Iceland Extended. <<http://icelandreview.com/news/2013/05/23/whale-reserve-southwest-iceland-extended>> Accessed August 23, 2016.
- Iceland Review (2013c) Minke Whaling Zone in Southwest Iceland Extended. <<http://icelandreview.com/news/2013/07/08/minke-whaling-zone-southwest-iceland-extended>> Accessed August 23, 2016.
- Icelandic Tourist Board (n.d.) Foreign Visitor Arrivals by Air and Sea to Iceland 1949-2015. <<http://www.ferdamalastofa.is/en/research-and>

statistics/numbers-of-foreign-visitors>

Accessed September 4, 2016.

IceWhale (The Icelandic Whale Watching Association)
(2014) Code of Conduct for Responsible Whale Watching.
<[http://icewhale.is/wp-content/uploads/2014/04/
IceWhale-CoC-20FEB2015.jpg](http://icewhale.is/wp-content/uploads/2014/04/IceWhale-CoC-20FEB2015.jpg)>
Accessed August 30, 2016.

IceWhale (n.d.) About IceWhale.
<<http://icewhale.is/about-icewhale>>
Accessed August 13, 2016.

IFAW (International Fund for Animal Welfare) (n.d.)
Ending Commercial Whaling.
<[http://www.ifaw.org/united-states/our-work/whales/
ending-commercial-whaling](http://www.ifaw.org/united-states/our-work/whales/ending-commercial-whaling)>
Accessed December 12, 2016.

石井敦・真田康弘 (2015) クジラコンプレックス—捕鯨裁判の
勝者はだれか—. 352pp., 東京書籍, 東京.
毎日新聞 (2007) クジラ: ウォッチングの観光客の目で捕獲
知床沖. 2007年8月25日付.

MRI (Marine Research Institute) (2012) *State of Marine
Stocks in Icelandic Waters 2011/2012, Prospects for the
Quota for Year 2012/2013*. 191pp., Marine Research
Institute, Reykjavík, Iceland.

New, L. F., Hall, A. J., Harcourt, R., Kaufman, G., Persons,
E. C. M., Pearson, H. C., Cosentino, A. M. and
Schick, R. S. (2015) The modelling and assessment
of whale-watching impacts. *Ocean & Coastal Manage-
ment*, 115: 10-16.

O'Connor, S., Campbell, R., Cortez, H. and Knowles,
T. (2009) *Whale Watching Worldwide: Tourism Numbers,
Expenditures and Economic Benefits*. 295pp., IFAW,
Yarmouth Port, USA.

Rasmussen, M. (2014) The whaling versus whale-watching
debate: The resumption of Icelandic whaling. In
Higham, J., Bejder, L. and Williams, R. eds., *Whale-
watching: Sustainable Tourism and Ecological Manage-
ment*. pp.81-94., Cambridge University Press, Cambridge,
UK.

Special Tours (n.d.) Andrea.
<<http://www.specialtours.is/about-us/boats/andrea/>>
Accessed August 7, 2016.

WDC (Whale and Dolphin Conservation) (2016)
Celebrating 25 Years of Whale Watching in Iceland.
<[http://us.whales.org/blog/2016/06/celebrating-25-
years-of-whale-watching-in-iceland](http://us.whales.org/blog/2016/06/celebrating-25-years-of-whale-watching-in-iceland)>

Accessed August 30, 2016.

WDC (n.d.) Whale and Dolphin Watching.
<[http://us.whales.org/issues/whale-and-dolphin-
watching](http://us.whales.org/issues/whale-and-dolphin-watching)>
Accessed December 12, 2016.

